また、腹の底から声を出す、身体を思いっきり動かす、他の子と切磋琢磨する、注意深く他者の動きを見る、指導者に見守られる、といったさまざまなことが、心のリフレッシュとエネルギーの補給、そして社会的能力の育成につながり、ひいては簡単に不登校へ陥らない心の耐性づくりとなっていることに気づかれるのではないだろうか。

▼6▲　いじめと武道

怖かったある光景

小学五年生の頃、私は柔道少年を主人公にした映画に影響されて何度か柔道の稽古に通ったことがある。家の近所の高校生たちが高校の道場の片隅で小学生たちに柔道を教えてくれたのである。いま考えると、当時の高校生はいまよりずっと大人だったのかもしれない。当時の私は稽古のある日が待遠しくてならなかった。

しかし、私は何度か通って、やめてしまった。理由は怖くなったからである。

受身も少し上達し、稽古の雰囲気にも慣れた頃、ある日の夕方道場に行ってみると、いつもと異なり何となく重苦しい空気がたちこめていた。日頃冗談を言っては笑わせるAさんも、やさしくあれこれと世話してくれるBさんも、黙々と稽古をしている。何があったのだろう、何が起こるのだろう――私は気になってしようがなかった。やがていつもより早く稽古が終わり、いよいよ何か始まるという感じで、部員が全員道場のへりに正座した。私はその時初めて、一人の学生服姿の生徒が入り口付近で終始うつむいていたまま稽古に加わらず、正座していることに気がついた。彼はぶるぶる震えながら座っていた。

やがて主将がおもむろに道場に入って来た。物静かな男前の人で私たち小学生の憧れの的だったが、この日はなぜか稽古には参加していなかった。副主将は荒々しく怖そうな人だった。主将がいつもの場所に座るのを見届けると、副主将が入り口に震えて座っている生徒をやおら蹴り上げた。悲鳴が聞こえた。それから何人かの幹部クラスの部員が彼の周りをぐるりと囲み、彼を見下ろしながら詰問し、柔道の技をかけたり、殴ったり、蹴ったりした。

何を答えても彼はやられる一方だった。泣き声と悲鳴。凄絶なリンチだった（子どもの目には恐ろしい地獄のような場面だった）。いつもは私たち小学生に手とり足とり親切に教えてくれるAさんもBさんも幹部クラスだったのでリンチに加わっていた。私は身体の大きな高校生の後ろに隠れてすべてを見ていない。最後に主将が「もういい」と言ってふらふらになった彼を解放し

た。

無断で柔道部をやめ、陸上部に入り、柔道部の悪口を言いふらした……これが小学生の私が知り得たリンチの理由だった。以後、私はその高校の道場に通うのをやめた。家族の誰にも、いや学校の友達にも、そんな恐ろしい光景を見たことを話せなかった。しばらくは自分も「無断でやめた」とリンチされるのではないかと恐れ、その高校の生徒を見かけるとあわてて逃げ帰ったりしたことを覚えている。

武道といじめ・暴力

私の小学生の時のこのような武道との出合いは特別なことなのかもしれない。しかし武道を途中でやめてしまった友人の話や、子どものカウンセリングの中で出てくる武道のエピソードの中に、部活動や道場でのいじめや暴力沙汰が語られることが少なからずあるのである。

現代のいじめが〈あそび〉の姿をまとっているのと同じ構造で、〈稽古をつける〉〈特訓する〉という隠れ蓑をまといいじめを行う例はいたるところで見られるのではないだろうか。注意しても「〇〇君のために稽古をつけてやった」と言い逃れできる。時には〈強い人間にする〉〈根性をつけてやる〉〈精魂を入れ直す〉などの名の下に私が目撃したような陰惨な暴力さえも行われ

てしまう。

一般にはいまだ、武道＝暴力というイメージが依然として広く存在する。それが武道人口の増加を妨げている原因の一つでもあろう。武道の指導者には何よりもこうした誤解がわき起こらぬよう、子どもたちの行動に心配りすることが求められているのではないだろうか。

いじめが発生しやすい状況

いじめは、子ども集団が次のような状態になっている時に発生しやすい。

●暴力モデルが常に示される

指導者自らが子どもに罵声（ばせい）を浴びせ、暴力をふるえば、それは、子どもに罵声の浴びせ方と暴力のふるい方を教えていることにもなる。気づかぬうちに人を脅したり傷つけたりするお手本を示すことになるのである。

●厳し過ぎたり、窮屈な雰囲気である

あまりに稽古が厳し過ぎたり、窮屈な雰囲気だと、子どもがエネルギーをのびやかに発散でき